

## 神風特別攻撃隊

レイテ沖海戦の際、日本海軍では、爆弾を装着した搭乗機もろとも敵艦船に突っ込む、戦法が実施された。

「決死」と言うよりは、まさに必死の戦法である。

それまでも、搭乗員自身の決断で体当たり攻撃を行った例は、我が「朝日長章」の開戦当時の「真珠湾攻撃でも」行われた戦法であったが、昭和十九年秋ごろには、劣勢な航空兵力では、「体当たり戦法」以外にはないと判断から、第一航空艦隊司令長官・大西瀧治郎中将が軍の組織的戦法として採用したのである。

編成された攻撃隊は「神風特別攻撃隊」と命名され、十月二十五日に出撃した、「敷島隊」は関 行男大尉指揮の爆装零戦五機が米空母一隻を撃沈、三隻に損傷を与えた。

これは、特攻による最初の戦果であった。

陸軍でもおなじ頃、「富岳隊」などの特攻隊が編成され、特攻は艦船に対する航空部隊のほとんど唯一の戦法となつて敗戦までに陸海軍併せて三千五百人以上の軍人が「特攻」で戦死したと言う。

神風特別攻撃隊に選ばれ、これを指揮して、レイテ沖で赫々たる戦果を挙げて散華した関 行男大尉、

八月十五日の「玉音放送」の後、「最後の」特攻隊員として基地を発つた中津留達雄大尉、既に家族もあり、人生の機微が分る青年であった、彼等「特攻隊員」は、いかなる思いで、その時を迎えたのであろうか。

